



内壁
二葉館の2階にある和室「旧婦人室」前の廊下を進んでいくと、突き当たり階段があります。ここでは、内壁の構造と、むき出しの配線をご覧いただけます。

内壁は、縄で結んだ竹木舞を下地として、荒壁、下擦り、大むら直し、小むら直し、中塗、砂漆喰、漆喰仕上の順に、実に7層にも重ね塗られています。表面の漆喰は艶があり、とても滑らかです。職人さんが一層塗っては乾かして、また上から一層塗る、という作業を繰り返して、手間を惜しまず時間をかけて完成させたようかかえます。

奥に見える黒い部分は、木摺りに釘で打ち付けられた約30cm角の平瓦の裏側で、「豎瓦壁」という明治から大正末期にかけて用いられた外壁下地です。そこから目線を上にあげ、天井裏の配線にも注目ください！びっしりと規則的に埋め込まれたこの配線は、野地板と垂木を一体で解体してそのまま復元されました。さすが電力王と呼ばれる桃介が暮らした邸宅だけあって、充実した電気設備が見て取れます。この配線は、配電盤のある床下から土壁に埋め込まれた鉄管を通して天井裏まで引かれていました。

二葉館の建物には、随所に大正建築の優れた技が見られます。じっくりと見渡せば、新たな発見があるかもしれません。

二葉館の2階にある和室「旧婦人室」前の廊下を進んでいくと、突き当たり階段があります。ここでは、内壁の構造と、むき出しの配線をご覧いただけます。

内壁は、縄で結んだ竹木舞を下地として、荒壁、下擦り、大むら直し、小むら直し、中塗、砂漆喰、漆喰仕上の順に、実に7層にも重ね塗られています。表面の漆喰は艶があり、とても滑らかです。職人さんが一層塗っては乾かして、また上から一層塗る、という作業を繰り返して、手間を惜しまず時間をかけて完成させたようかかえます。

奥に見える黒い部分は、木摺りに釘で打ち付けられた約30cm角の平瓦の裏側で、「豎瓦壁」という明治から大正末期にかけて用いられた外壁下地です。そこから目線を上にあげ、天井裏の配線にも注目ください！びっしりと規則的に埋め込まれたこの配線は、野地板と垂木を一体で解体してそのまま復元されました。さすが電力王と呼ばれる桃介が暮らした邸宅だけあって、充実した電気設備が見て取れます。この配線は、配電盤のある床下から土壁に埋め込まれた鉄管を通して天井裏まで引かれていました。

二葉館の建物には、随所に大正建築の優れた技が見られます。じっくりと見渡せば、新たな発見があるかもしれません。



配線

IRODORI
いろどり

文化のみち二葉館は、関係各所への聞き取り調査や所有している古写真、新聞・雑誌などの文献資料などを基に復元されています。今回は「階旧婦人室」にまつわる古写真についてご紹介します。

外側で撮られた写真
和館部分は、ほぼ創建当時に近い形で残されていますが、増築されていた部分もありました。旧婦人室についても、旧二葉荘（大同ライフサービス所有時の名称）時代には幅の広い縁側が増築されており、古写真のよくな外壁はありませんでした。



創建当時の様子



現在の様子

創建当時に使用されていた材料は残されていませんでしたが、木目がはっきりと写っていることから、杉板であったと判断されました。しかし、今回の復元では耐久性などを考慮し、板の厚みや使用する材料は変更となりました。写真からは板の幅が大小まちまちであることや、基礎には洋館の外壁

と同じ石が張られていることなども確認されています。現在の二葉館は、当時の姿にできるだけ近い形で復元されました。

※写真(左下)の人物については詳細不明

床の間で撮られた写真
右上の写真から床の間周りは当時のまま残されていたことが確認されました。

現在は、貞奴の愛用品などで当時の室内の様子を再現しています。床の間には桃介が書いた掛け軸と貞奴が愛用していた三味線が、手前側には古写真に写っていた火鉢(展示品はレプリカ)が展示してあります。

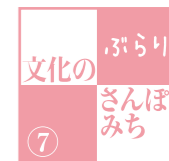
※右上写真の貞奴と桃介の間に座っている女の子は、桃介の孫(長男・駒吉の娘)。



旧二葉荘時代
(1階右奥が婦人室)



創建当時の婦人室外



「主税町公園」



主税町周辺に大規模な絵付け工場を建設しました。この場所が選ばれた理由が次の三つです。

一つ目は広大な土地が手に入りやすかったこと。この地域は江戸時代の武家屋敷跡が多く、商業的にも未熟であったことなどから、工場建設のための広大な土地を安く手に入れることが出来ました。

二つ目は陶磁器の生産地として有名な美濃や瀬戸から続く街道(下街道・瀬戸街道)が通っていた、荷受けがしやすかったこと。

三つ目は市内中心部を流れる堀川が近いこと。工場で絵付けされた陶磁器は堀川でハシケ船(河川などで荷物運搬に用いられる平底の船)に積み、四日市港に運ばれていました。

二葉館から西に歩いて10分ほどすると「主税町公園」があります。昨年10月、公園内に「名古屋陶磁器輸出産業ゆかりの地」と題した案内銘板が設置されました(※)。銘板には東区付近で陶磁器産業が栄えた経緯などが記されています。

この辺りにはかつて「森村組」という大規模な陶磁器の絵付け工場があり、明治から昭和にかけて、東区付近は多くの陶磁器の絵付け工場や貿易業者が軒を連ねる日本の輸出陶磁器の最大産地、集積地でした。最盛期の昭和初期には関連事業所は約六五〇件、約二万四千人もの従業者がいたそうです。日本で作られた輸出用の陶磁器の約8割がこの地域で絵付け加工され、世界に向けて出荷されていました。

「森村組」は現在のノリタケやTOTO、日本ガイシなどの森村グループの前身となつた会社です。明治9年に6代目森村市左衛門と異母弟・豊によって東京・銀座に設立され、アメリカ向けの和風雑貨や陶磁器などの輸出を行っていました。

明治25年に名古屋に進出した森村組は、その後の明治29年頃には東京や京都に散らばっていた絵付け工場を名古屋に集約し、

明治40年に名古屋港が開港してからは名古屋を本拠地とする貿易商が増え、名古屋の陶磁器産業はますます発展していきました。その後、第二次世界大戦で壊滅的な打撃を受けながらも発展し続けた名古屋の陶磁器産業ですが、周辺諸国の台頭や円高などの要因によって今ではかつての勢いは失われてしまいました。工場跡地は少しずつ民家となり、昭和45年には主税町公園が開かれるなど、陶磁器産業の衰退とともに街の様子も少しずつ変化していきました。

※制作:東区文化のみちガイドボランティアの会

from Archive
書庫棟から
同人雑誌



活躍する作家が出てきました。現在なお、数多くの同人雑誌が発行されています。二葉館2階の展示室7では、愛知県内を中心に発行している同人雑誌を展示しておりますので、手に取って読んでみてはいかがでしょうか。

次回の文学企画展では、「中部の同人雑誌展―清水信さんを偲んで―」を開催いたします。中部地方で創刊された同人雑誌の紹介と、同人雑誌評の第一人者、清水信さんの没後1年を悼み、それまでの創作活動とともにゆかりの資料をご紹介します。どうぞ、楽しみにしてください！

そもそも、同人雑誌とは何か、「広辞苑」で調べると「主義・傾向・趣味などを同じくする人たちが共同で編集発行する雑誌。同人誌。―とあります。

文芸同人誌の起源は、明治時代の小説家・尾崎紅葉らを中心として創刊された「我楽多文庫」(明治18年)に遡るといわれ、そこには小説、詩、短歌、川柳などが掲載されていたようです。文学好きの仲間同士で編まれたこの同人雑誌は、回覧雑誌として出版し、のちに好評となり書店で販売され広く知られるようになりました。

明治時代を起りとする同人雑誌は、大正から昭和の戦前まで盛行をみます。テレビの無い時代において、当時の文学や思想などを個人が自由に発表できる、重要な表現方法のひとつだったのでしよう。そして戦後再び活性化し、芥川賞などの文学賞を受賞して



展示室7(常設展)